



## 2015年度 関西独自消費材の放射能検査結果

### ■ 関西独自材の放射能測定結果

生産者	対象消費材	産地	検査日	検査機関	Cs134	Cs137	セシウム合計
山梨自然塾	桃	山梨県	7月1日	生活クラブ	ND	ND	ND/7.7
茨城BM	土付きらっきょう	茨城県	7月8日	生活クラブ	ND	ND	ND/7.2
熊本経済連	和牛	熊本県	7月22日	放射能汚染食品測定室	ND/0.4	ND/0.5	ND/0.9

【検査結果の見方】 単位：Bq/kg 「検出値/検出下限値」で示します

半減期の長いセシウムに絞って検査をしています。セシウム134、セシウム137の合計値で「検出限界値」を記載します。

検出値欄のNDは、検出限界値未満での不検出を表します。

※13年4月から生活クラブ飯能DC検査室に導入した5号機はセシウム137とセシウム134の合計値で算出することにより感度を高めています。そのため、連合会の検査ではそれぞれの数値は表示されません。

### 8月は805検体の放射能検査を実施しました。

7月5回～8月4回（7/27～8/30）の放射能検査は飯能DCと戸田DC、放射能汚染食品測定室（測定室）及び外部機関で計805検体の消費材検査を実施しました。検査の詳細情報は生活クラブ連合会のホームページの放射能検査結果Web検索をご参照ください。 <http://www2.seikatsuclub.coop/housha/>

放射性セシウムが検出されたのは関西では取扱いのない、生椎茸（山形県、群馬県、埼玉県、静岡県）の提携産地）、菌床生椎茸（群馬県）、アマランサス、舞茸、レンコン、エリンギ、もち米、無洗米岩手一関米の11品目・計24検体で、自主基準値を超えた消費材はありませんでした。その他の781検体は不検出でした。

### 生活クラブではどんな放射能検査をしているのですか？

#### 2011年3月11日以降の検査が80,000検体を超えました

##### ① 検査の回数

消費材を万遍なく検査しています。例えば醤油であればこの4年半の間に、49回。豚肉は410回検査しました。（いずれも生産者の自主検査を含みます。）「不検出」の結果を積み上げることで、安心して食べられる証明をしています。2014年度は19,687検体を測定しました。飯能、戸田両DCでのワーカーズへの測定作業委託費、検体試料の購入費、検査機の減価償却費など合わせて約4,000万円が必要でした。

##### ② 状況の変化に合わせて検体数を減らして、検査精度（検出下限）を追究してきました

生活クラブの放射能検査はチェルノブイリ原発事故の2年後から放射能汚染食品測定室（測定室）で始めました。11年3月の福島第一原発事故の直後は測定室で週3検体程度原乳、畜肉、鶏卵中心の検査をしました。

放射能検査は同じ検査機、同じ検体量で、検出下限を半分にするためには、検査時間を4倍にしなければなりません。汚染状況と、積み上げた検査結果から、検体数と検出下限のバランスを取りつつ、検査機の能力を最大限使い、検査を継続してきました。

「放射能検査結果Web検索」 <http://www2.seikatsuclub.coop/housha/> では日付での検索と消費材での検索ができる様になっています。

「最新の放射能検査結果」 <http://seikatsuclub.coop/coop/news/post.html/> もご参照ください。

裏面に3.11以降の生活クラブの放射能検査体制の経過を表にまとめました。

ご覧ください。

## 生活クラブの放射能検査体制 全品目検査から精度の高い検査へ

3.11の事故直後は、どれだけ食品への放射能汚染がひろがっているかわかりません。そのため自前の検査機器導入当初は、時間をかけて限られた消費材だけの精密な検査するのではなく、検査時間を短くし、とにかくお届けする消費材の全品検査に傾注し、汚染実態の把握を優先させました。そうした民間では群を抜く数量の検査データが蓄積されたことによって、リスクの少ない消費材の検査回数を減らし、より検査の必要な消費材を選定し、精度を高めた検査に移行することができました。

	検査体制の拡充	加工食品検出下限 (原乳検出下限)	1週の検体数 検査の目的など
第1ステップ 2011年9月～	Nal 2インチ2台導入	約100 Bq/kg (6～15 Bq/kg)	約600検体/週 供給している食品ほぼ全品目の検査
第2ステップ 2012年1月～	Nal 3インチ2台追加 導入 計4台	20～40 Bq/kg (6 Bq/kg)	約520検体/週 国の基準以下であることを確認。
第3ステップ 2012年4月～	3・4号機用3リットル マリネリ容器導入	15～30 Bq/kg (2 Bq/kg)	約420検体/週 自主基準運用開始、基準以下であることを確認。 関西以西などリスクの少ない消費材は回数減らし、検査時間を延長しました
第4ステップ 2013年4月～	5号機追加導入 (オートサンプラー付)	8～10 Bq/kg (2 Bq/kg)	約380検体/週 1～4号機の検査時間の延長で検出下限を自主基準値の1/4以下が実現しました。
第5ステップ 2014年4月～		8～10 Bq/kg (2 Bq/kg)	約380検体/週 累積した検査実績から、産地により、検査しない品目を決めて、検査品目が必要な消費材の検査頻度を増やしました。
第6ステップ 2015年4月～	Ge半導体検査機の外部委託開始	3～8 Bq/kg (1 Bq/kg)	約230検体/週 本ニュース7月配布分で詳しく報告しました。